

# 執事の二枚舌——Kazuo Ishiguro の *The Remains of the Day* を日本語で読む

菅野 素子

この論文は、日系英国人作家カズオ・イシグロの『日の名残り』(*The Remains of the Day*, 1989) を、日本語翻訳を通じて読み、さらには英語のテキストと比較することで、この小説が日本ではどのように受容されたのか、その一端を明らかにしようとするものである。

『日の名残り』は、1989年に英国でもっとも権威があるとされるブッカー賞を受賞したイシグロの代表作である。これまでに20カ国語以上に翻訳され<sup>(1)</sup>、世界的に多くの読者を獲得している。また、大学で教材として取り上げられるなど、現代の英文学の正典とも言うべき作品である<sup>(2)</sup>。日本では、1990年に土屋政雄の翻訳が中央公論社から出版され、1994年1月には同社から文庫化された。1994年4月には同作品の映画(監督: James Ivory, 製作: Ismail Merchant, 1993年)が日本でも公開された<sup>(3)</sup>。現在、日本ではイシグロの小説はすべて早川書房から出版されており、同社から2001年に再版された『日の名残り』の文庫版はこの10年間で少なくとも17回増刷されている。

すでにかかなりの批評の蓄積もあるこの作品を「日本語翻訳を通じて」考えるなどという迂回路をとる理由は二つある。一つ目は、翻訳が言葉の単純な置き換えではなく、あくまでも原文の深い理解に基づく精読の一種と考えられることだ。翻訳は湛然に読み込む作業だけが可能にする解釈を目標言語で提示する<sup>(4)</sup>。時には、翻訳という英日の言語の間の交渉によつ

て、英語では曖昧であった要素がかえって日本語で明確となることもあるだろう。二つ目は、イシグロという作家が日本でどのように受容されたのか、翻訳を事例として検証するためである。イシグロの小説は決して難しい英語で書かれているわけではないが、必ずしも日本の読者にアクセスしやすいというわけでもない。イシグロは、典型的なイギリス人でも日本人でもない「ホームレス」の立場にあり、だからこそ「国際的なことから、人間に共通することがらについて書く」ことを迫られたと言うが（イシグロ・青木 305）、国境を越えた普遍的なテーマを書くと言べる作家の創作上の関心を額面どおり受け取ってもよいのだろうか。

従って、本稿は翻訳研究であると同時に、カズオ・イシグロの『日の名残り』をめぐる作家作品研究として位置づけられることを目指す。手続きとしては、まず、文体の面からみた作品の特徴を概観し、それが日本語翻訳でどのように訳出されたのかを考察する。特に、起点テキストにおける「読みやすさ」や「余韻」といった特徴が、日本語翻訳テキストでどのように再構築され、それがどのような効果を上げているのかに注目する。さらに、「読みやすさ」という翻訳規範が文化的に距離のある事象に適用された場合、日本語翻訳の読者や受容環境に合わせて、どのような読みかえがなされたのか、それはどのような意味を持っているのかを検討する。

## 1 「余韻」と「読みやすさ」を翻訳する

カズオ・イシグロのスタイルはよく「騙されそうなほどに簡素」(deceptively simple) (山形 30)、「言葉少ない」(elliptical) (Dyer 25) などと評される。イシグロはこれまでに出版した小説7作すべてで一人称の語り手の視点を採用しているが、イシグロの語り手たちはどちらかといえば平易な語彙を用い、俗語をほとんど使わず、目の覚めるような斬新な表現とは無縁で、英語の文法規則を律儀に守って語る<sup>(5)</sup>。だが、これもイシグロのナラティブ戦略である。小野寺健は、感情を抑えた表現がかえって読者の想像力に

働きかけるため、寡黙な語り手は実は饒舌な語り手でもあると評価する（「カズオ・イシグロの」27）。イシグロの小説に精神分析理論を援用する批評が多いのも、抑圧されたものや語られていないものを読み解こうとする試みに読み手をいざなうためであろう<sup>(6)</sup>。巧みな比喩表現が言語の厚みを生み出すものであるとしたら、イシグロの語り手たちはそうした言葉の潜在的な可能性をそぎ落としたかのような言葉で語るため、起点テキストの比喩表現を意識して目標テキストの文脈に置換えるよりも、逐語的な訳によって魅力を発揮するタイプの文章なのではないか、との指摘もある（山形 31）。

様々に表現されるイシグロの文体を、山内啓子は定量的かつ質的に分析し、その特徴を「情感」と名付ける（507）。山内によれば、この「情感」は「読み易さの生み出す産物」である（507）。イシグロの語り手たちは概して一文が長く、一つの文章に含まれる単語数の面からは、ヴィクトリア朝小説の英語のような重厚で息の長い語り口を持つと言えるが、実際にはコンマやセミコロン等の句読点の使用により文章が区切られて読みやすいものになっている（500-501）。その結果、字面を追うための読み手の負担は抑えられ、その分行間の余韻や余白、つまり「情感」に読者の関心が向かう（507-508）。さらに山内は、『日の名残り』の原テキストはコンマ等の使用法に特色があり、挿入句が多用され、誤解や言い忘れないよう細心の注意を払って語ろうとする「くどくどした」老執事の語り口を生み出していると述べる（506）。加えて、語彙や表現の特徴として、執事のデイスコースには婉曲表現と過小表現（アンダーステイトメント）が多用されていることをあげる（506）。

イシグロの文体に関する山内の分析は、これまで他の批評家が述べてきたイシグロの文体的な特徴を「情感」という言葉で捉えなおして裏付けている。さらに、山内の分析で注目すべきなのは「情感」——すなわち、含意やアイロニー等テキストの表面上の意味を超えた余韻——を「読みやす

さ」と結び付け、その産物としている点である。つまり、読みやすさと情感は、ともすると互いに疎外しあうように思えるが、イシグロの小説においては互いに関連がある。そして、「情感」の意味を立ち上がらせるのは、それを読み解こうとする読者である、としている点である。

山内の議論はここまでだが、ここには翻訳との関係で興味深い問題が提起されている。翻訳では、まず翻訳者が読者として、実際の読者との間に介在する。さらには、翻訳には翻訳の想定する読者——たとえそれが想像上の読者であったとしても——が存在する。翻訳者という介在者を経て、起点となる英語テキストの持つ「情感」、つまり文化や言語のコードに深く根ざした意味合いや、余韻といった曖昧でとらえがたい部分は、翻訳テキストの目標とする環境でどの程度、あるいはどのように訳出されるのだろうか。特に、執事の修辞法として「過小表現」や「婉曲表現」が用いられているならば、このような問題はさらに重要となる。

本稿は、起点テキストである英語の *The Remains of the Day* が日本語翻訳を規定するオリジナルとして絶対的な権威を持つと考えるものではないが、読みやすく滑らかな日本語翻訳を生み出すためであれば原テキストをどれほど意識してもよいと考えるものでもない。翻訳作品を原作およびその作者の文脈から完全に切り離すことはできない。ロラン・バルトが「作者の死」において、あるいはミシェル・フーコーが「作者とは何か」において、それぞれに論拠は異なりながらも、作品の単一の起源にして解釈を牛耳る権威者としての作者を切り離したとはいっても、それは無限の解釈可能性を寿いだというよりも、作品から作者を解放することで「テキスト」を社会的文化的な文脈によって構築され読み解かれるもの、つまりは分析の対象となるべきものとして再提出したと考えるべきである。翻訳者は見えない作者が背後で見守る中で仕事をする、とはイシグロ本人が述べるところだが (Wong, 'Like Idealism' 180)、原テキストと翻訳テキストの間に位置する翻訳者は両方の力関係に巻き込まれており、翻訳は両者の



交渉の産物であると考えたい。

以下に、批評家も一目置くイシグロ独特のスタイルが、日本語ではどのように訳出されたのかを具体的に考察する。特に注目するのは、原テキストとの比較で「読みやすさ」と「余韻」の点で日本語翻訳者が工夫をしたと見なせる明らかな違い、具体的には「ですます調」の語尾、三点リーダの反復「……」の追加、段落の細分化、である。このような工夫が何を示唆しているのか、以下の引用を用いながら、具体的に検討していく。

まず、引用の部分について簡単に説明する。以下は「三日目——夜 デヴォン州タピストック近くのモスクムにて」からの一節である。この晩ステイーヴンスは、やむなく予定を変更してモスクム村の民家テイラー家に一夜の宿を求める。その晩、村人たちがテイラー家に集まってくる。村人たちの前でステイーヴンスは、自分は国際関係で活躍した者と経歴を偽り、「品格」に関する自論を述べる。ところが、村人の一人ハリー・ミスから、民主主義を守ってこそ人間の品格が維持できる、そのためにナチスと戦ったと反論されて論破できない。自室に引き取った後、ステイーヴンスはダーリントン卿の盟友ミスター・スペンサーから三つの質問を投げかけられた晩のことを回想する。ミスター・スペンサーは、一般国民は無知であるとして民主主義の原則の一つである国民主権に反対した。その主張を証明するためにステイーヴンスを呼び出し、英国経済や外交に関する三つの質問をする。そのいずれにも期待された執事の領分を守って「分かりかねます」と応えた、紳士の挑発に乗らずに執事の「品格」を保った、というエピソードである。なお、英語の原文は文末注を参照されたい<sup>(7)</sup>。

もちろん、こうしてダーリントン卿のお言葉を思い出しておりますと、卿のお考えの多くは、今日、奇異な感じを——ときには醜悪な感じすら——聞く人に抱かせるかもしれないという気がいたします。し

かし、あの朝、ビリヤード室で卿が私に語ってくださったことの中には、重要な真実が含まれていたことも否定できません。ミスター・スペンサーが私にお尋ねになったたぐいの質問に権威をもって答えることなど、どのような執事にも期待するほうが無理と申すものでしょう。それができなければ「品格」を保てない、などというミスター・スミスの主張は、ナンセンスの最たるものと言ってよからうと存じます。執事の任務は、ご主人によいサービスを提供することであって、国家の大問題に首を突っ込むことではありません。この基本を忘れてはなりません。国家の大問題は、常に私どもの理解を超えたところにあります。大問題を理解できない私ども (such as you and I) が、それでもこの世に自分の足跡を残そうとしたらどうすればよいか……？ 自分の領分に属する事柄に全力を集中することです。文明の将来をその双肩に担っておられる偉大な紳士淑女に、全力でご奉仕することこそ、その答えかと存じます。(イングロ 239-240)

山内啓子が指摘した文体上の特徴を確認しておきたい。この部分の起点テキストの1文に含まれる単語数は、25語、27語、58語(30語、28語)、14語、12語、71語(19語、12語、13語、27語)だが、長い文章はカッコ内に示したようにいくつかの文章に切って翻訳され、全体として30語を超えないように調整されている。文章の区切りは、一つの例外を除いてカンマやセミコロンで繋がれた箇所に入れられ、意味の単位や語順を保ちつつ、読みやすい長さで切られていることが分かる。構文の特徴としては、形式主語や仮主語の 'it' を用いた文章が多い。また語調を弱める動詞である 'seem' や 'can be seen' のような表現も頻出する。こうした構文や表現が一步引いた控えめで丁寧な感じと共に形式的な感じを醸し出している。執事口調の「くどさ」が最も端的に見られ、説明を加えようとして言い換えるフレーズとしては 'the fact is' および 'that is to say' がある。ここで

は、前者は訳出されず、後者は「その答えかと存じます」と意識されている。婉曲表現は常に「婉曲的」に訳出されるわけでもない。日本語で「醜悪な」と翻訳されている部分は原文では‘unattractive’、直訳すれば「魅力がない、さえない」となる過小表現の一種である。ダーリントン卿の反ユダヤ主義を婉曲的に表現したこの部分、翻訳者はその意を汲んで「醜悪な」と嫌悪感が一層明確になる言葉を選んでいる。また、「国家の大問題」(the great affairs of the nation) は婉曲表現の一つと考えられる。これは、ほぼそのまま逐語訳されている。「国家の大問題」とは政治経済外交問題のことだが、語り手はそれを「偉大な」(great) という言葉で抽象化すると共に疎遠化している。政治的な判断から自らを疎外する語り手らしい表現である。また、同じ表現が三度繰り返されている。紙面の都合で詳述する余裕はないが、ステイヴンスは同じ言葉や表現を繰り返し使う傾向のあることを指摘しておきたい。繰り返しに同じ訳語を当てて「くどさ」等繰り返しの生み出す効果を訳出するか、言い換えてより滑らかな訳文を目指すかは翻訳者の判断である。土屋政雄訳では「国家の大問題」には同じ訳語をあて、二度繰り返す‘of course’ という表現は言い換えている。

### (1) 「ですます調」の語尾

引用にも明らかなように、『日の名残り』の語りの部分は「ですます調」を基調とした丁寧語で翻訳されており、これが日本語翻訳の大きな特徴である。日本では明治維新以来、外国語からの翻訳には基本的に「である調」が用いられ、海外の文学作品が「ですます調」で翻訳されることはあまりない。翻訳者の土屋政雄も、他の作家の作品では通常「である調」の語尾で翻訳している。土屋はイシグロの六作目の小説『わたしを離さないで』(*Never Let Me Go*, 2005) の翻訳にも「ですます調」の丁寧語を使用しているが、この作品における丁寧語の使用は『日の名残り』とはまた違った側面がある<sup>(8)</sup>。土屋はイシグロの七作目にあたる『夜想曲集』

(Nocturnes, 2009) の翻訳も手がけているが、この作品は「である調」で翻訳されている。このように、翻訳における丁寧体は、イシグロの作品に関しても、土屋政雄の訳業に関しても、極めて少数の作品に限定して使われている。

だが、この例外的な語尾の使用が、日本語翻訳では際立った効果を挙げている。土屋の翻訳は、書評等でも「見事なもの」(川本 279; 工藤 13; 丸谷 126) と評判が高い。また、既にいくつか発表されている翻訳批評でも極めて好意的に評価されている。柴田元幸は、日本語の文体を平常体 (normal form) と敬語 (polite form) に分けた上で、敬語を用いた丁寧な口調の翻訳は、同業の執事に対しても丁寧に話しかけるスティーヴンスの人物像を反映し、それは物語を提供する際の「謙遜」を表すと同時に、語りかける対象へのよそよそしさや「距離」——単に語りの受け手だけではなく個人としての自分からも——を示唆する、と指摘する (38-39)。『日の名残り』における語りの「ですます調」翻訳は、スティーヴンスの人物造形上の必然性があり、作品のテーマである自己をめぐる真実から目を背けるために生ずる語り手の自己欺瞞 (Lodge 155) をも訳出しており、作品のテーマが目標言語によって捉えられている点が評価されている。

そのことは、上記の引用を「～である調」で翻訳し、ですます調と比較してみることでより明らかとなろう。

もちろん、こうしてダーリントン卿のお言葉を思い出していると、卿のお考えの多くは、今日、奇異な感じを——ときには醜悪な感じすら——聞く人に抱かせるのではないかと気づく。しかし、あの朝、ビリヤード室で卿が私に話されたことの中には、重要な真実が含まれていたことも否定できないだろう。(略) 国家の大問題は、常に我々の理解を超えたところにある。大問題を理解できない我々が、それでもこの世に自分の足跡を残そうとしたらどうすればよいのか。自分の領分

に属する事柄に全力を集中することである。文明の将来をその双肩に担う偉大な紳士淑女に、全力で奉仕することこそ、その答えであろう。(イシグロ 239-240。土屋政雄の翻訳をもとに筆者による改変を付加)

語尾を「～である」に変えると言い切りのニュアンスが強まり、文章によっては強い断定の口調となる。例えば「全力を集中することである」という部分では「である調」と「ですます調」との比較により、どちらを使用するかで語られる内容の曖昧さや語り口が左右されることに気づかされる。

「ですます調」の丁寧体に謙譲表現を混ぜたスティーヴンスの語りの言語は、まずは常に執事として語りかける職業上の語り口を日本語で訳出した等価物と考えられる。それには二つの特色がある。一つ目は、語りの地の文と会話文とが同じ語尾で翻訳されて両者の間に文体上の明確な境がないため、人前では決して執事という職業上のあり方を放棄しないと述べるスティーヴンスが、言語の上でも常に執事として語っているように読めるという点である。これは語りの地の文を「である調」で翻訳した場合には得られない効果であり、翻訳における語尾選択が老執事の人物造形上欠かせないものであったことが納得される。二点目は、直接的な物言いを避けるという意味で一種の婉曲表現とも考えられる「ですます調」の生み出す執事らしさが、スティーヴンスの語りに一種のリアリティを与えているという点である。それは曖昧さや余韻を伴うが、これも「である調」では得られない効果である。

また、上記のように語尾を「である調」に変更しようとして気づくのは、単に語尾を変えるだけではなく、全体的に文の調子を調整する必要があること、特に、誰に対して敬語を使うのかという問題の存在である。「ですます調」の丁寧語尾は、もっぱら聞き手に向けて使用されていると

考えれば、「である調」の文章ではダーリントン卿との関係にのみ敬語を使うことになろう。上記は、そのような前提のもとに訳出した例である。だが、ダーリントン卿の政治的思考を婉曲的に‘unattractive’と表現した語り手は、この時点では前雇用主に対する尊敬の念を失っていることも考えられる。その場合、「お言葉」の「お」を外し、あるいは「話された」を「語った」とするなど、さらに調整が必要となるだろう。敬語の身振りを削ぎ落とすと、スティーヴンスの語りからは、柴田元幸が述べるような一歩へりくだり、そこにできた距離を緩衝地帯として物語の場を形成し(39)、語りの曖昧さや余韻を生み出す、そうした距離感が希薄になる。

この距離感によって作られる物語の場は、丁寧体で訳出されることにより創出されるものであって、語り手とダーリントン卿の間に、そして語り手と読者との間の距離として、婉曲表現と余韻を生み出すものとして、安定的に構築される。それは、ある意味で「敬意」とは関係なく構築されうる。日本語における敬語の働きを「ポライトネス理論」を用いて分析した滝浦真人は、日本語の敬語は、発話の向けられる人物に対して常に敬意を表出しているわけではなく、「言語的なふるまい」であり、相手との距離を保ちその領域へ踏み込まないための遠隔化を狙った対人配慮の方略であると述べる(50-55)。スティーヴンスの場合は特に、相手の領域に踏み込まないだけでなく、相手にも自分の領域に踏み込ませないという疎遠化関係の構築を意図したという意味で、「ネガティブ・ポライトネス」の関係といえる<sup>(9)</sup>。この距離は、敬語によって築かれるが、話者の疎遠化したいという意志を示すものでもあり、それは一種の緊張関係を孕む。

このように考えると、「ですます調」の翻訳にはさらなる効果があることが分かる。敬語を使うと、語り手が尊敬の念からダーリントン卿に敬語を使うのか、敬遠したいがために敬語を使うのか、その移り変わりや気持ちの揺れを同じ口調でカモフラージュできる。ここに至る語りの中で、ダーリントン卿の政治的立場を「醜悪」と表現し、卿の下で働いたことを

三度までも否定したスティーヴンスは、表向きは元雇用主に対して敬意を表しながらも、実際にはそこから自分を遠ざけたいと願っている。「ですます調」の語りは、こうした二律背反から生まれる葛藤を表出し、かつ隠蔽する。ここに、スティーヴンスが本当に言わんとしていることに対する「余韻」が生まれてくる。執事の二枚舌である。

なお、「ですます調」が生み出す語り手と読者との関係については、この作品の鍵を握るものでもあるので、後にもう少し別の角度から言及する。

## (2) 補完された余韻

『日の名残り』においては、語りの丁寧体がイシグロの文体に評判の「余韻」の訳出に欠かせないものであることが分かった。丁寧な語りは語り手の感情の起伏を生き生きと表現するよりも抑えて表現するため、常に本心との間のズレを暗示し、このズレが語り手の言い足りない部分を読者に想像させるという面がある（山内 507）。また、婉曲表現や過小表現にもそうした読者の想像力を喚起する機能が期待される。だが、‘unattractive’の例にも見たように、婉曲表現は常に婉曲的に翻訳されるわけでもない。

日本語翻訳で「余韻」を、最も直接かつ効果的に生み出しているものの一つと考えられるのが三点リーダーの反復「……」である。日本語翻訳にみられる「……。」や「……？」は、英語テキストにはなく、翻訳者が付け加えたものである。土屋政雄の翻訳は、英語の原文に寄り添いつつ日本語に移し替えるという意味で原文に忠実な訳であり、文芸翻訳のお手本のような翻訳である。読者の情報不足を埋め、あるいは意味的に等価の日本語がないために説明的な翻訳で補足した箇所は多くない。それにもかかわらず、英語の原文にない語尾、すなわち「……。」や「……？」を語尾に補っている箇所が散見される。これは、語りの地の文にも会話の中にも見受けられる。

三点リーダは、約物と呼ばれる特殊記号の一種で、古来の日本語にはなく、欧文における同様の句読点への対応として翻訳文で使われるようになり、日本語にも定着したものである<sup>(10)</sup>。だが、日本語では極力使わない傾向もある。欧文の等価物として翻訳ものには馴染んでいいる一方、翻訳であることが一目瞭然となるため、翻訳の日本語としての質の高さを阻む要因ともなりうるためである。それでは、『日の名残り』における三点リーダの付加はどのような効果をあげているのだろうか。

引用した部分の該当箇所を使って具体的に考えてみたい。「大問題を理解できない私どもが、それでもこの世に自分の足跡を残そうとしたらどうすればよいか……？」の部分である。ここでは、三点リーダの反復だけではなく、疑問符も追加されている。言い切った場合に比べて、語尾がかなり曖昧になる。これは、意味的にも時間的にも読者が想像をめぐらせる空間として作用し、スティーヴンスが出した疑問への答えを読者が考える間や、言われるべき事柄や言葉にならない感情の省略、ある種の静けさ、あるいは同じ質問が反復され共鳴するような間と解釈できる。あるいは、語り手が答えを引き延ばす間——しかも、かなりもったいぶった——でもあろう。なぜなら、スティーヴンスには他人に聞くまでもなくこの質問に対する答えがわかっており、「……？」は反疑問のニュアンスを強調する意味で追加されているものとも考えられたためである。そう考えると、この間は引き延ばしだけではなく、その次に来る答え「自分の領分に属する事柄に全力を集中することです」を強調する働きもしている。その一方で、モスクム村での一件を考えれば、自らの意志を裏切り続けてきたスティーヴンスがようやく本心をのぞかせる気になり、解答に迷って引き伸ばしている、だがやはり自己を否定せざるを得なかった、そのような葛藤の間と読むこともできる。

このように、日本語翻訳では、意味の曖昧さを付け加え、さらには余韻を生み出す効果のために、これら三点リーダの反復が文末に補完されてい



る。つまり、こう考えることはできないだろうか。翻訳者はイシグロの英語に評判の「余韻」を日本語翻訳で再現するためには「ですます調」の語尾だけでは不十分と判断して連続句読点を補足したのだ、と。補完された余韻は、内容をほかし、語尾を濁すだけではなく、視覚的かつ空間的に省略と間の記号として作用する。そして、そこには、語り手と聞き手、あるいは読み手の間で疑問、共感、距離の拡大などの効果を生み出している。

### (3) 段落分け

翻訳者がさらに工夫を試みているのが、段落の切れ目である。日本語翻訳では、一つの段落が印刷された本の体裁で10行程度となるよう調整されている。この規則は全編を通して、長い段落に適用されている。

長い段落を切って読みやすくすることは、日本語翻訳ではそれほど珍しいことではなく、段落を小分けにすること自体は欧文翻訳の決まり事として受け入れられている。また、段落の考え方自体、英語と日本語では異なるので、起点テキストの段落をそのまま目標テキストでは維持しにくいという事情もある。その一方で、『日の名残り』の翻訳者である土屋政雄は、段落を単位として翻訳することを原則とし、意味を伝える単位として、文章よりも段落を重要視していると述べる（土屋・新井）。イシグロの六作目で、同じ「ですます調」で翻訳した『わたしを離さないで』は、段落分けは起点テキスト通りである。翻訳者の職業規範に例外を作ってまで段落を分けた、その効果はどのようなものなのだろうか。

その要因として、読みやすさを求めたということが考えられる、長すぎる段落は、あまり読者に親切とはいえない。英語のステイーヴンスは、一段落がかなり長い。例えば、最初に引用した箇所は「三日目一夜」の最終段落の冒頭の部分だが、この段落はその後切れ目なく二ページ半以上に渡って、あたかも意識の流れの小説であるかのように延々と続く。この最終段落において、語り手はナチスの傀儡であったダーリントン卿を擁護す

ることを放棄し、卿に仕えたことで自分があたかも共犯者のように見られることに異論を唱え、「人類の進歩に寄与しておられる紳士」（イシグロ 135）であったはずのダーリントン卿の「愚考」（イシグロ 243）によって自らの執事としての評価を決定しようとする人々の考え方を最終的には「非論理的」（イシグロ 243）として自己正当化する。だが、それは苦しい言い訳を含み、そこに至る段落の流れは大きな矛盾を含んだものである。ダーリントン卿の政治活動を否定する一方で、政治的・道徳的に信頼できる雇い主——つまりダーリントン卿——への「分別に裏付けられた忠誠心」（イシグロ 293）を主張し、かつ執事はこうした判断を主人に任せるべきであって、主人と政治的見解を異にしているいい仕事ができない、と述べ政治的主体を放棄する。こうした大きな論理的破綻をはらむ内容を、イシグロは呼吸を置かず語り続けるスティーヴンスの感情の高まりに水を差すことなく、息もつかせぬ勢いで語らせる。

この長い段落を、日本語訳は八つに分けている。この区切りがなければ、出版された書籍の体裁で、一段落分四ページの長さに渡って続いた段落である。段落分けの工夫により、語りの流れが整理され、内容の切れ目が明確化されている。例えば、先に引用した部分の次の段落は「当たり前なことではないと言われるかもしれません。しかし（略）」（イシグロ 241）、それに続く段落は「このような理想主義に支えられた議論には、たしかに（略）」（イシグロ 241）と始まり、前の段落の内容を受けて、それに反論しあるいはさらに言葉を費やして強調する、そうした流れがよりはっきりと提示される。また一定の長さで段落を切り、息継ぎのスペースが与えられたことで、一種のリズムや抑揚が生まれている。読者にとっては、こうした切れ目は内容把握の助けとなる。読みやすさが重視されているのである。

これほど長い段落は『日の名残り』の中でもまれだが、日本語翻訳者が段落を解体したことで逆に明らかになるのは、スティーヴンスの語りが時

に冗長と感じられるほど長いことである。語り手はトピックで段落を切っておらず、語りの加減で段落を変えており、論理的に段落を組み立てていくような語り手ではない。このような語りの特徴は、『日の名残り』が記憶をめぐる物語であり、過去と現在、ダーリントン・ホールと旅先とを行き来する非直線的でランダムな語りの構造をとっていることにより、恣意的なものというより、自然なものに見える。だが、長い段落は意味や流れの切れ目をいくつも含んでいる。起点テキストはこうした切れ目を同じ段落の中に混ぜ込んで、語り手が論理的な展開や批判的な考え方には慣れていないことや、その混同した思考回路を提示すると共に、表面的には静かに見える語り、実は饒舌で感情的なものであることをうかがわせる。

段落の細分化は、語り手の人物造形にも影響を与えている。日本語翻訳ではスティーヴンスの感情的な一面よりも冷静で論理的な一面が強調される傾向がある。つまり「読みにくさ」を生み出す饒舌な部分を抑えることで、読みやすさを追求したのだともいえる。皮肉なことではあるが、「読みやすさ」という翻訳規範が、スティーヴンスの語りに見られる饒舌さ、すなわち抑圧された感情の大きさのある程度吸収してしまったようにもとれる。

これまで考察してきたように、『日の名残り』の日本語翻訳は、イシグロの文体の評判、すなわち「騙されそうなほどに簡素」で「言葉少ない」平易な語彙を用いた読みやすい散文との評判、ある意味でイシグロのトレードマークともなった特徴を日本語でも再現するよう様々な工夫がなされている。「ですます調」に謙譲表現を混ぜた語尾を用い、余韻を表す句読点を追加し、段落の長さを調整して語りの饒舌さを軽減するなど、読みやすさと余韻を再度日本語の環境で作り直しているのである。起点言語での評価が目標言語に翻訳する際の規範とされ、翻訳先の環境で受容すべき価値として認められたのである。

## 2. 執事の語りと文化のステレオタイプ

### ——イギリスとイングランドの距離を翻訳する

しかし、婉曲的な表現を多用した口調が老執事の人物造形といかに適合したものであっても、丁寧な文体が生み出す礼儀正しさと読者との距離だけで語りの場を形成し操作することは難しいのではないだろうか。読者を引き付ける何かがなくてはならないはずである。これは既に批評の論点ともなっているイシグロの小説における読者の問題に通ずる<sup>(11)</sup>。また、『日の名残り』のナラティブは「信頼できない語り手」という手法の面から議論されることが多いが、このタイプの語り手がもっぱら作者と規範を異にするという意味で信頼できず、作者および読者との距離を前提としたレトリックであるにもかかわらず (Booth 158-159; Lodge 154-155)、スティーヴンスは起点テキストの読者に対して「強い共感をさそう」(Sim 45) 語り手でもある。それでは、スティーヴンスの語りは、どのようにして語りの受け手を語りに引き込もうとしているのだろうか。そして、日本語翻訳は、それをどのように訳出しているのだろうか。そうした要因とみられる要素を二つ検討する。「ですます調」の生み出す一種の親密さと、文化的な権威の問題である。

スティーヴンスの語りの語調は、単に丁寧なものであるだけではなく、親密さと疎遠さが融合したものである。例えば、語り手はしばしば、「ご説明いたしますよ」や「もう少し詳しくお話しいたしましょう」という枕詞の後で、様々なエピソードを披露する。また、「ご存知ない方もいらっしゃるかもしれませんが」といった前置きで説明を加える箇所もある。明らかにお話をするために語りかけ、事情に疎い人にも配慮して自らの語りに包摂しようという身振りをする。この部分を「説明しよう」や「もう少し詳しく話そう」とすると、いかにも押し付けがましく偉そうな口調に聞こえ、読者との間にも、かえって距離が生じてしまうだろう。日

本語は「ですます調」で翻訳されていることで、執事が一步引いてお辞儀をするような雰囲気と昔話で聞き手に仕えてもてなすような、距離だけではない一種の親密さが付加されているように読める。

語りにおける丁寧さを取り上げた論考において阿部公彦は、「ですます調」の文章が「ほほ制度的」に児童文学に適用されている点に注目し<sup>(12)</sup>、児童文学における「ですます調」が読者とのある関係性を示唆しているという(26)。その関係性とは、江戸川乱歩の怪人二十面相シリーズの「ですます調」の分析においては、コミュニティの同質性である。阿部はさらに、均質で親しい関係の前提となったコミュニティに向けた「お話をいたしましょう」という行為は、語ることによって与え喜ばせるという意味での「愛」の贈与であると述べる(25)。この「愛」はそれが言語化された過剰な部分、すなわち、お話で楽しませ聞く者の関心を引き止めておくために作りこんだ細部や大げさな表現を伴うが、そうした過剰な部分を期待感という形で幾重にも作り出す役割を「ですます調」は果たす(24)。

物語という形で「愛」の贈与にあって、「ですます調」の丁寧体が語り手と聞き手との間の距離だけではなくある種の親密さを包含すると述べている阿部の論点に注目したい。『日の名残り』は児童文学ではない。だが、日本語の丁寧体が紡いできた「お話を聞かせる」ことに伴うある種の親密さ、そして語り手と読者との関係性は、この作品の日本語翻訳を考える上で一つの参照点となる<sup>(13)</sup>。

物語をめぐる語り手と読者との関係は、怪人二十面相シリーズにおいて、事情に通じた大人を語り手とし、語りの直接の受け手たる子どもとの上下関係として構築される。それは、一方的な知識の付与と享受の関係を生み出しながら、表向き安定した語りの構造として機能していく。つまり、楽しませながら知識や情報を与えるという贈与の関係には、手の内を明かそうとする側の語り手の優位があらかじめ想定されている。それにもかかわらず、語り手は聞き手に配慮して距離をとっている。従って、それ

は親密なだけではない、ある種の緊張を孕んだ関係だと言えそうである。事件の顛末を知っている語り手は、内容にまつわる権威を保持し、物語を操作し引き伸ばしながら読者に対する優位な立場を維持するが、事件が解決してその関係が崩れたときに、物語の構造も「ですます調」で構造化される上下関係も消滅する。親密さは、表向きは固定したように見えるヒエラルキーの関係が恣意的で不安的なものであることを隠蔽し、かつ暗示する。

日本語訳の『日の名残り』において、語りの受け手の存在は実のところはっきりしない。英語の起点テキストでは、語り手である I に対する直接的な受け手として 'you' で呼び俤わされる人々が想定されている。読み進めるにつれて、この 'you' は一般的な読者ではなくスティーヴンスの同業者や元同業者、つまり「同じ布から裁断された」（イシグロ 23）同質的なコミュニティに向けられたものであり、実際の読者は執事の仕事話を盗み聞きするかのような立場に置かれていることが分かってくる。例えば、語り手は最初に引用した部分に呼応する原テキストでは 'such as you and I' という形で、別の場所では 'likes of you and I' という表現で両者を収斂させていく。だが、日本語の翻訳では特別の場合を除いて「わたし」や「あなた」といった人称代名詞を訳出しないという事情があり、語りの受け手が曖昧なまま話が進む。つまり読者が「私ども」で指示される人々ではないこと、語りの受け手と翻訳の読者が異なるものであることを示す記号が極力除かれている。

しかし、語りの受け手が曖昧であることが、かえって「ですます調」で翻訳された語り手と読者の関係構築に役立っている。人称代名詞が訳出されないことで、丁寧語を基調にした『日の名残り』の日本語翻訳では、敬語による関係が語り手のスティーヴンスと翻訳の読み手の間に直接成り立つと考えられるためである。敬語は、話の向けられる相手の存在を示唆する。スティーヴンスの語りの直接の受け手は、日本語の翻訳では人称代名

詞としては訳出されないものの敬語を使うことで常に語りの受け手の存在を想定していると読めるのである。もちろん、語りの受け手と実際の読者を混同すべきではない。だが、「である調」で訳出された場合には想定されていない語り手と読者との関係が、敬語の使用により読者への配慮という形で常に立ち上がり、記述されることも確かである。あるいは、こう言い換えてもよい。敬語で翻訳されることにより、スティーヴンスの語りは翻訳の読者を語り手と聞き手の関係に呼び込み、巻き込み、ある種の共犯関係を構築しようとするのだ、と。このように、『日の名残り』における敬語の使用は語り手と読者との間の距離を表すだけではなく、両者の間に物語をめぐる親密な関係をも生み出すものと考えられる。

スティーヴンスと翻訳読者との関係はまた、イギリスと日本との二国間関係として構築されている。これは、イギリスの日本に対する優位の関係でもある。お話しすべき価値のある内容としてスティーヴンスの手元にあるのはイギリスのお屋敷にまつわる珍しい話である。このような話を知り得るという意味で、スティーヴンスは読者に対して優位に立つ。英国では、執事が文学のストックキャラクターとして確立している。例えば、P. G. ウッドハウスのジーヴィスものやファース（笑劇）のレパトリーである「執事が見たもの」である<sup>(14)</sup>。このようなジャンルが流通していない日本では、「本場」イギリスの執事は馴染みのない存在である。こうした受容環境の違いもあって、日本では『日の名残り』が英国の神髄を描いたものであるとして評価され（工藤 13）、あるいは「本物」の執事が絶滅寸前であることを「イギリス的なものの喪失」として嘆く向きもある（黒岩 15-16）。事情に通じ、お話を「与える」ことのできる文化の仲介者としてのスティーヴンスの語りは、日本語翻訳の読者に対して一種の権威を持つ事になるだろう。実際に、スティーヴンスは「ご存知ない方もいらっしゃるでしょうが」と、匿名の読者に配慮しているかのような呼びかけを行うのである。ここに、特権的な異文化の物語を、知識的には優位に立ちなが

からも増長しない奉仕の身振りで語り続ける執事たるスティーヴンスと日本の読者というヒエラルキーの関係が成り立つものと考えられる。翻訳によって召還されるのは、このような読者である。

語り手と翻訳読者との関係がイギリスと日本との二国関係として訳出されているのは、土屋政雄翻訳が 'England' の訳語に「イギリス」を採用していることにもよる。'England' に「イギリス」という国名を当てることは穏当な選択である。長年そのように翻訳されてきた経緯もある<sup>(15)</sup>。日本語には、連合王国やブリテンという国名よりも、イギリスという国名がより一般的に流通していることも確かだ。だが、もちろん「イギリス」という訳語を採用することで、失われるものもある。例えば、以下のような箇所である。

執事はイギリス (England) にしかおらず、ほかの国 ([o]ther countries) にいるのは、名称はどうであれ単なる召使いだ、とはよく言われることです。私もその通りだと思います。大陸の人々 (Continentials) が執事になれないのは、人種的に (as a rule)、イギリス民族 (the English race) ほど感情の抑制がきかないからです。大陸の諸民族 (Continentials)——そして、ご賛同いただけると存じますが、ケルト人 (the Celts)——は、一般に、感情が激した瞬間に自己の抑制ができず、そのため、至極穏当な状況のもとでしか職業的あり方を維持できません。先ほどのたとえにもどりますと、まことに下品な表現で恐縮なのですが、少し挑発されただけで上着もシャツも脱ぎ捨て、大声で叫びながら走り回る人のようなものです。そのような人には、「品格」は望むべくもありません。この点で、イギリス人 (We English) は絶対的優位に立っています。偉大な執事のイメージを思い浮かべようとするとき、その執事がどうしてもイギリス人 (Englishman) になってしまうのは、至極当然のことだと申せましょう。(イングロ



49-50. 強調は筆者による)

土屋政雄による日本語翻訳は、England の訳語にイギリスを当て、English race を「イギリス民族」と翻訳している。この訳語からは、イギリスは国民国家としてのまとまりを持っていることが強調され、イングランド人の他、ケルト系のウェールズ人、スコットランド人、アイルランド人のネイションがいることは訳出されていない。

もちろん、帝国主義的なイデオロギーに与する語り手自身がイングランドをイギリスと同一視しているきらいもある。これは、イングランドすなわちイギリスと考える見方であり、ここには帝国主義の残響が聞こえる。しかし、英語の原テキストでは 'England' や 'English' をかなり限定し、ネイションとしてのイングランドの意味で使用しているように読める。そこには他のネイション、すなわちウェールズ人やスコットランド人との関係で、かなり明確な優劣関係がある。イングランドはアングロ＝サクソン系白人の住む国であり、連合王国の中においては国土の面でも人口の面でも軍事外交の面でも最も強く、ウェールズ人やスコットランド人を支配するネイションだとする考え方である。それが可能なのは、「感情の抑制がきかない」ケルト人と比べて、イングリッシュは職業的あり方を安易に放棄しないためである。こうしたイングランド人にまつわる「神話」は、特に大英帝国の支配の神話である「動かない上唇」(stiff upper lip) に代表される<sup>(16)</sup>、感情を表に出さないイングランド人のやせ我慢の比喻であるように読める。また、'We English' というようにイングランド人は一枚岩的で同質的なネイションであることが強調され、'Englishman' というように、そこからは女性や子どもは除外されている。スティーヴンスは、イングランドの白人男性を頂点とするネイションのヒエラルキーを裏書きし、イングリッシュのステレオタイプを肯定的に捕らえ、そこに自己同一化させているのだが、England をイギリスと翻訳するとそうした連合王国内のネイ

ションの力関係や同質性の問題ははっきりとは見えてこない。

このことから推察されるのは、起点テキストにおいてステイーヴンスが England というシニフェイエで指し示す内容と、作者が指し示すものとの間には差異がある、ということである。日本語翻訳は、連合王国国内のネイション間の複雑な関係を表に出さずに「イギリス」という国名で単純化して、読者との間にイギリスと日本という二国間の関係を構築している。ステイーヴンスの用法を採用しているのである。これは英語と日本語というテキストの言語関係にも呼応するため、翻訳の読者を物語に包摂しやすくなる。その反面、イシグロの「やかましい」部分は抑えられている<sup>(17)</sup>。イシグロは、イングランドというネイションに向けて書いているが、そうした意図が見えにくくなってしまいうためである。そもそも、イシグロのアイデンティティの問題を考える際には、イギリス人とイングランド人との差異は重要な意味を持つ。作家は、自らのアイデンティティがイギリス人、すなわち英国人やブリティッシュから疎外されないまでも、イングランド人には完全に包摂されないと感じているためである (Ishiguro and Oe 58)。イシグロが語り手にイングランド人の老いた執事を設定したのも、イングランド人の神話を裏書するためではなく、こうしたステレオタイプを生成し流通させてきた支配的なディスコースに介入するためだと考えられる。批評の中にはイシグロを「日本的」すなわち寡黙で口数が少ない「静かな」作家と見なすものも少なくないが、決してそうではない。

その一端は、イングリッシュネスのステレオタイプである老執事の「動かない上唇」にうかがえる。この上唇が徐々に崩壊し、終には海を見ながら泣くまでの、すなわち執事の「品格」という「ファサード」が落ちる過程を描くことで、そうしたステレオタイプを許容するイングリッシュネスの権威が作られたものであることを暴露している。「動かない上唇」はステイーヴンスのようなワーキング・クラスの階級モデルではなく、大英帝国の支配を先導したアッパー・ミドルクラスの男性のメンタリティを代表

するものだ。イシグロはこの小説で、そうしたメンタリティを階級の面からかく乱すると共に、それが普遍的な価値を持つものではなくパフォーマンスであることを示して、本質主義的な文化としてのイングリッシュネスという見方に切り込んでいる。起点テキストである *The Remains of the Day* において、作者は自らを排除する「イングランド人」とは誰のことなのか、既成概念を揺るがせ、問い直しているのである。

このような問い直しは、1980年代英国の文化的現況を背景としたナショナリズムへの関心の高まりとともにイングリッシュネスという研究分野の進展に回答しているようにみえる。80年代の英国は、サッチャー政権のもとで人種に対する圧力が強まった。1981年には、「国籍法」が改正され、移民制限が一層強化された。この改正法は、入国定住に関する血統主義に加えて市民権のカテゴリーからも、祖父母以降の代がイギリス国内で生まれた者以外の者でイギリスに入国する者を排除する規定を設けた（浜井 73）。その一方で、「ブリティッシュ」と呼ばれる人びとは人種的文化的にますます多様化し、発言力を強めていた（浜井 76-77）。旧植民地からのニューカマーの受入れ数は抑えられたものの、高等教育を受けた移民二世が職業につき、経済力を強めていた（Rosen 93-96）。イングランドで生まれたにもかかわらず、イングリッシュとして認められない人びとが増えていたのである。ブリティッシュが文化の多様性を包摂する指標として流通するのに対して、イングリッシュは人種的にますます排他的なナショナルアイデンティティとなる。イシグロが『日の名残り』において介入しようと試みているのは、人種的にも文化的にもますます特権化する「イングリッシュ」というアイデンティティ形成を促す支配的なイデオロギーである。

このようなイシグロの「やかましい」部分は、England をイギリスと読み換え、語り手と翻訳テキスト読者との関係を、単純な二国間の関係として構築した日本語翻訳からは見えづらい。その代わり、スティーヴンスは

「イングランド」という一ネーションではなく「イギリス」を代表する文化的伝統と読み換えられ、特権的な立場に引き上げられたといえる。一枚岩的なイギリスを強調することで、それに呼応する日本語の読者との関係が、二国間関係として、翻訳の言語関係に付随する安定したものとして築かれたのである。

こうした二国間関係の構築に、「ですます調」が大きく貢献している。スティーヴンスの語彙に見られる誇張した表現の度合い——それは帝国主義的ミリタリズムの残響のようにも聞こえる——を緩和する効果があるように思われるためである。スティーヴンスはお屋敷の裏方を小さな軍隊のようにとらえており、1923年にダーリントン邸で行われた非公式の国際会議に際しては、「将軍が作戦を練る」がごとく準備をし、「軍隊調に檄を飛ばす」（イシグロ 90-91）ことも行った。また、ミス・ケントンが表現するように、使用人の側から見るとスティーヴンスの口調は「訓辞」や「演説」のように聞こえた（イシグロ 264）。また、他にも、「国家の大問題」、「文明の将来」（the destiny of the civilization）といった婉曲的だが誇張した言い回し、執事の「任務」（duty）といったやや気負った表現、「品格」（dignity）や「偉大さ」（greatness）といった理想主義的な表現とその繰り返しがあげられる。こうした表現を含む語りは、先にみたように「である調」で翻訳した場合かなりものものしい雰囲気醸し出す。スティーヴンスが時に使用する勇ましくも堅苦しくそれでいて滑稽な語彙が、日本語翻訳においては、あくまでも「である調」との比較により言えることではあるが、丁寧体や謙譲表現により勢いを削がれて執事の領分の中に収められている。このようにして、スティーヴンスの語りに含まれる気負った部分やキナ臭い部分、すなわち読者の関心を物語から阻害するような「読みにくい」部分が、日本語の敬語の中に飼いならされたとと言える。

日本語の翻訳テキストでは、イギリスとイングランドの間の差異を還元

的に翻訳している。これは、読者と作品との距離を遠ざけ、文化的な読みやすさを阻害する要因を退けようという翻訳上の配慮であると考えられる。こうした配慮により、England を「イングランド」と翻訳した場合に露呈するイシグロの批判意識は目立たなくなった。また、前節で検討した「ですます調」の語尾により、ステイーヴンスの語彙が喚起するキナ臭さもある程度薄められた。このようにして『日の名残り』そして作者であるイシグロは、「英国の神髄」を再現できるほど、移動先の文化に深く根ざした作家として受容されたのである。

## むすび

本稿では、カズオ・イシグロの代表作である『日の名残り』の翻訳分析を通して、この作品を解釈し、作者の問題意識を探ってきた。その結果、自らの「ホームレス」な立場が国際的なテーマで書くことを必然とするのだという発言にもかかわらず、少なくとも『日の名残り』において、イシグロはイングランド人というネーションの問題への介入を試みており、その問題意識は極めて「国内的」なものであることが明らかになった。英国の出版業界が「国際的」な作家を求めるのは、英国社会の多文化化の文脈だけではなくむしろ、読者を海外に求めて販路を拡大する必要もあるのだろう。ここには、新たな形での出版帝国主義を警戒するイシグロの態度もうかがわれる。

しかし、こうした国内的な問題は日本語翻訳の読者にとって身近な問題ではなく、関心を引きにくい。より分かりやすい記号が必要である。そこで、語り手である老執事の語りや、その文化的な権威が重要になる。本稿で検討したように、「ですます調」の丁寧体に謙譲表現を混ぜる独特の文体で翻訳されたステイーヴンスの語りは、日本語における語りの聞き手から距離を置くと同時に、ある種の親密さで語り続ける。ステイーヴンスの人物造形を具現化したものであると見なせる語りは、同時にリアリティの

創出にも貢献し、文化的なインサイダーとしての権威も与えていた。このことが、語るべき話を持っている語り手と日本語の読者の間に、一種の文化的なヒエラルキーを構築した。その関係は連合王国国内のネイションの関係性を翻訳者が整理し、イギリスと日本という文化の二国間関係として提示したことによって助けられた。

イングランドをイギリスと翻訳した日本語訳の『日の名残り』は、従って、イングランドを連合王国でもっとも有力で支配的なネイションだと考える帝国主義的な味方に、はからずも賛同しているように見え、この点で一枚岩的なイングリッシュネスに挑んでいるイシグロの企みを阻んでしまったようにも思える。あるいは、還元的に翻訳することで、「イギリス」という国名の持つ曖昧さを逆手に取ったと言えるのかもしれない。いずれにしても、この点は翻訳の問題である以上に「イングランド」というネイション名が日本でどのように翻訳・受容されてきたかという文化史的な検討課題を含んでいる。今後は、イングランドとイギリスが同義語として翻訳されてきた経緯の分析も含めて、研究を進めていきたい。

## 注

- (1) UNESCO Index Translationum, <<http://www.unesco.org/xtrans/bsresult.aspx?a=ishiguro%2C+kazuo&stxt=the+remains+of+the+day&sl=&l=&c=&pla=&pub=&tr=&e=&udc=&d=&from=&to=&tie=a>>, 2011年11月26日アクセス。
- (2) キャノン形成と大学の英文学講座との関係については、次の論考を参照のこと。ジョン・ギロリー「正典」、フランク・レントリッキア、トマス・マクローリン編、大橋洋一他訳、『現代批評理論 22の基本概念』、平凡社、1994年、493-523。
- (3) この映画は、1993年の米国アカデミー賞の主要八部門にノミネートされた他、日本でも『キネマ旬報』誌の1994年年間ベストテン第七位となるなど健闘した。「1位は『全身小説家』キネマ旬報の1994年ベストテン発表」、『朝日新聞』1995年1月13日朝刊、33。

- (4) このような考え方の一例として、小野寺健「批評としての翻訳」『イギリス的人生』晶文社、1983年、297-302参照。
- (5) 例えば、『わたしたちが孤児だったころ』(When We Were Orphans, 2000)の語り手クリストファー・バンクスの語りは、日中戦の最前線であった中国人居住区に迷い込んだ場面のように精神的な極限状態にあっても、感情の起伏が文法の混乱という形で言語に反映されない。
- (6) 翻訳者の土屋政雄によれば、*The Remains of the Day* というタイトルはオランダの作家とのタイトル交換によりつけたものであるという(301)。小説の印象を決めるタイトルにフロイトの精神分析用語である「その日の名残り」が与えられたということ自体、この小説と精神分析批評との馴染みのよさを物語っている。他にも、Brian W. Shaffer の *Understanding Kazuo Ishiguro*. University of South Carolina Press, 1998 がフロイトの精神分析を用いた読解を試みている。
- (7) It occurs to me in recalling these words that, of course, many of Lord Darlington's ideas will seem today rather odd – even, at times, unattractive. But surely it cannot be denied that there is an important element of truth in these things he said to me that morning in the billiard room. Of course, it is quite absurd to expect any butler to be in a position to answer authoritatively questions of the sort Mr Spencer had put to me that night, and the claim of people like Mr Harry Smith that one's 'dignity' is conditional on being able to do so can be seen for the nonsense it is. Let us establish this quite clearly: a butler's duty is to provide good service. It is not to meddle in the great affairs of the nation. The fact is, such great affairs will always be beyond the understanding of those such as you and I, and those of us who wish to make our mark must realize that we best do so by concentrating on what is within our realm; that is to say, by devoting out attention to providing the best possible service to those great gentlemen in whose hands the destiny of civilization truly lies. (Ishiguro 199)
- (8) 一例を挙げると、『わたしを離さないで』の語り手キャシー・Hは「ございます」や「存じます」のような謙譲表現は使わない。
- (9) これに対して、「ポジティブ・ポライトネス」とは、相手との距離をなく

し、身近な存在と意識した場合の言語的なふるまいである。滝浦真人は、敬語を敬意の表現ではなく、ポライトネス理論、すなわち対人配慮の言語実践との観点から捉えなおしている。詳しくは『ポライトネス入門』研究社、2008年の第三章を参照のこと。

- (10) 大類雅敏『句読点活用辞典』東京：栄光出版社、2006年。他に以下のウェブサイトも参照した。<<http://www.sophia-it.com/content/3点リーダー>>、<<http://bunsyouahou.web.fc2.com/santenleader.html>> 2011年11月26日アクセス。
- (11) 例えば Cynthia F. Wong が「読者」の問題から作品にアプローチしている。Cynthia F. Wong, *Kazuo Ishiguro*, second edition, Horndon [DV]: Northcote House, 2004 参照のこと。
- (12) 同様の指摘は、イシグロの小説の日本語翻訳について論じた Motoyuki Shibata, 'Lost and Found' にもある。
- (13) 日本語の「ですます調」には、丁寧語としての一面と、言文一致の文脈がある。本稿において『日の名残り』を言文一致の観点から詳細に論ずることは、私の手に余る。次稿以降に譲りたい。
- (14) P. G. ウッドハウスのジーヴィスものは、戦前の日本では既に翻訳が出版されていた。
- (15) 例えば、『國史大辞典』（吉川弘文館）は1979年の出版以来「イギリス」という項目の英語として England を採用している。
- (16) こうしたイングリッシュの神話は、文学作品を通じても流通した。ジョージ・オーウェルは「鯨の腹の中で」で次のように述べている。'With Maugham it is a kind of stoical resignation, the stiff upper lip of the pukka sahib somewhere east of Suez, carrying on with his job without believing in it, like an Antonine Emperor.' (Orwell, 26).
- (17) イシグロ自身が懸念するように、文化的なステレオタイプが提示されても、それが鵜呑みにされることもある（イシグロ・青木 308）。

## 引用文献一覧

### 一次資料

- Ishiguro, Kazuo. *The Remains of the Day*. London: Faber and Faber, 1989.  
イシグロ, カズオ. 『日の名残り』土屋政雄訳, 東京: 中央公論社, 1990年.



二次資料

- Booth, Wayne C. *The Rhetoric of Fiction*. Second edition. London: Penguin, 1991.
- Dyer, Geoff. 'On Their Mettle.' *New Statesman* 3. 2871 (4 April 1986): 25-26.
- Hensher, Phillip. 'It's the Way He Tells It ...' *Observer Review* 19 March 2000: 11.
- Ishiguro, Kazuo and Kenzaburo Oe. 'The Novelist in Today's World: A Conversation.' *Conversations with Kazuo Ishiguro*. Eds. Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong. Jackson: University Press of Mississippi, 2008, 52-65.
- Lodge, David. *The Art of Fiction*. London: Penguin, 1994, 154-167.
- Orwell, George. *Inside the Whale and Other Essays*. Harmondsworth: Penguin, 1962.
- Rosen, Andrew. *The Transformation of British Life 1950-2000: A Social History*. Manchester: Manchester University Press, 2003.
- Shaffer, Brian W. *Understanding Kazuo Ishiguro*. Columbia: University of South Carolina Press, 1998.
- Shibata, Motoyuki. 'Lost and Found: On the Japanese Translations of Kazuo Ishiguro.' *In Other Words...: The Journal for Literary Translations* 30 (2007): 32-39.
- Sim, Wai-chew. *Kazuo Ishiguro*. London: Routledge, 2010.
- Wong, Cynthia F. 'Like Idealism to the Intellect: An Interview with Kazuo Ishiguro.' *Conversations with Kazuo Ishiguro*. Eds. Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong. Jackson: University Press of Mississippi, 2008, 174-188.
- . *Kazuo Ishiguro*, Second edition, Horndon [DV]: Northcote House, 2004.
- 阿部公彦「善意と文学——語りの『丁寧』をめぐる——第二回『怪人二十面相』はなぜ「ですます」なのか」『英語青年』2011年5月：11-27.
- イシグロ、カズオ & 青木保「カズオ・イシグロ——英国文学の若き旗手——」『中央公論』1990年3月：300-309.
- 小野寺健「カズオ・イシグロの寡黙と饒舌」『英語青年』1988年11月：27-29.
- .『イギリス的人生』晶文社、1983年
- 川本三郎「一身にして二世を経る痛苦」『文学界』44(11)：276-279.
- 工藤美代子「英国の神髄描き切る」『朝日新聞』1990年8月5日：13.
- 黒岩徹『イギリス式人生』岩波新書、1997年.
- 滝浦真人『ボライトネス入門』研究社、2008年.

- 土屋政雄「訳者あとがき」カズオ・イシグロ『日の名残り』土屋政雄訳，東京：中央公論社，1990年，298-301.
- 土屋政雄・新井潤美「対談：翻訳の世界——カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』をめぐって」城西大学紀尾井町キャンパス，2007年6月9日.
- 浜井祐三子「多民族・多文化国家イギリス」木畑洋一編著『現代世界とイギリス帝国』ミネルヴァ書店，2007年，63-93.
- 丸谷オー「海を見ながら泣く執事——現在のイギリスに対する哀惜と洞察——」『週刊朝日』1990年11月16日：125-126.
- 山形和美「翻訳で何が重要か——カズオ・イシグロをめぐって」『時事英語研究』1988年7月：30-31.
- 山内啓子「カズオ・イシグロの文体——余韻と情感を生み出すイシグロ作品の特徴——」富山太佳夫・加藤文彦・石川慎一郎編『テキストの地平——森晴秀教授古希記念論文集』英宝社，2005年，497-509.

## Butler's Double-tongue: Reading Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day* through Japanese Translation

SUGANO Motoko

This study concerns the Japanese translation and the reception of Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day*. By taking an en-route approach via the Japanese translation to Ishiguro's best loved yet culturally-difficult book which features an unfamiliar world of the English butler Stevens, it attempts to gain access to the in-between space of the English text and the Japanese translation where two languages and cultures negotiate and hidden meanings in the original are unveiled. The first section of the essay considers how Ishiguro's highly praised 'deceptively simple' yet 'resonant' style is rendered in Japanese through a couple of unconventional approaches: the use of the polite form as opposed to the ordinary form, the addition of ellipses (.....), and alteration of paragraph breaks. The second section extends the consideration of the use of the polite form as a means to enhance the authenticity of Stevens's cultural narrative. The Japanese translation renders Stevens as the representative of *Igirisu*, which more often signifies Britain than England to the contemporary Japanese readers. The avoidance of the use of *Ingurando* (England) makes Ishiguro's challenge toward the fixed notion of Englishness less conspicuous. As such, it contributes to the portrayal of Stevens as an authentic *Igirisu* figure, one who, with regard to the Japanese readership, is related to a more familiar country. This essay argues that both the Stevens's and the author Ishiguro's verbosity is moderated in the Japanese translation for the sake of securing resonance and accessibility in the Japanese context.